

# 愛媛若葉ひろみ句会

神の庭双手に蝉の時雨かな

大川 眺春

片陰や拾ひ歩きの二人連

毛利 敦

扱花はきままに巻けり右左

小西 あや

乾坤のしずけさを浮く水馬

梶原 一美

父に似る後姿の夏帽子

松岡 寛孝

老ひとり限界集落河鹿鳴く

伊藤 京

青嵐白カーテン連れ吹き抜けり

井谷 けい

蝉時雨採血の腕青くなり

福本 恵子

空蝉や過ぎたる記憶のやや苦き

高橋 妙

ひとりづつ潜るのれんの涼しかり

浜田 千鶴

苔を生す樟の大樹や蝉時雨

長田 徳子

水打つや挿木に小さきひと芽かな

藤田 光子

泣きたいだけ泣いたあとはすつきりと鏡に向い口紅を引く

佐々木登美子

戴きし新茶の香り心地良く夫在りし日の茶摘み偲びをり

高田 治子

吾が夫は晩酌楽しバラダイス今宵も美味し元気に明日も

西添 春子

父の顔知らぬ曾孫とうから等が五十年忌にみ寺に集ふ

山本まつゑ

原爆を二度と使はせなるものか「はだしのゲン」が世界へと行く

武田 幸子

今日も暮れ家計簿付ければ残高が七が五ケタでラッキセブン

二宮 安恵

先生の心こもりし毛筆の賀状暖かし茶の間に飾る

蛭谷 寿子

嵐山六十年目の渡月橋修学旅行想い出しをり

芝 幸子

雨上り茶摘み終りてうぐいすの声をききつつミシン踏みをり

兵田トミ子

月三度採血されて長らえる生きる倅せしみじみ思う

伊手リツエ

## 広見短歌会

### 鬼北の足跡を辿る…【第9回】

#### 上鍵山防空監視所

8月の終戦記念日にちなんで、太平洋戦争にまつわる戦争遺跡を紹介します。

戦争末期、日本各地の都市や施設に対する空襲が激化し、多大な被害を被っていました。昭和20年4月末、軍部から旧日吉村上鍵山・医王寺の境内に監視所設置の話があり、準備に取り掛かりました。

準備といっても現在のようない重機などはなく、電柱ほどの大きな杉材を7本も使用した監視やぐらの設置などには、携わった上鍵山の人々も苦労したようです。

この上鍵山防空監視所に駐屯していたのは、「熊本航空隊通信部日吉分遣隊」で、大阪出身の加地伍長以下8名（伍長は当時の陸軍の階級の一つ）。米軍の航空機の来襲を、いち早く重要拠点に知らせる役割を担っていました。やぐら最上部には、常に監視員が交代で監視に当たり、非常時の合図用に寺の釣鐘を最上部につけていました。寺の本堂は無線室となり、隊員は本堂に寄宿しました。隊の携

帯武器は、軽機関銃1丁、九式短小銃（当時の最新式小銃）各人1丁ずつ。前線部隊でも武器が不足していた時期に、この装備であることを考えると、この隊の任務は重要視されていたのかもしれない。

昭和20年8月15日、本土決戦に備えての配備という話でありましたが、さほど緊迫感もなく終戦となりました。短期間ではありましたが、地域の人々との交流などいろいろな思い出を残しました。



防空監視所の置かれた山（遠景）